

富山県小矢部市

# 道林寺遺跡

1987. 3

小矢部市教育委員会



道林寺遺跡周辺（昭和50年撮影）

富山県小矢部市

道林寺遺跡

1987. 3

小矢部市教育委員会

## 序

小矢部市旭生南部地区の土地改良事業は、去る、昭和52年に完工いたしました。この地区一帯に遺跡が多数分布することは当時から知られており、事業の実施にあたっては、これらの保護をめぐり論議が重ねられております。その結果、日の宮遺跡、道林寺遺跡、竹倉島遺跡の一部は記録保存のやむなきに致ったものの、大部分の遺跡は地元の方々、土改関係者の方々のご理解により、田面高調整などの設計変更を行なっていただき、永く保存されることとなったのであります。

今回発掘調査を実施いたしましたのは、このうちの道林寺遺跡南端部にあたります。この遺跡は、富山県教育委員会が昭和49年度に実施しました発掘調査によって、古墳時代中期の集落跡であることが明らかになっております。この遺跡の西方、砺波山丘陵には多数の古墳が分布しております。1500年余り前の人々は、この地からこれら首長の奥津城を仰ぎ見ながらくらしていたことでしょう。ここから出土する遺物は私達に多くのことを語りかけてくれます。遺物にあらわれたいろいろな特徴は、畿内などの影響を少なからず受けていることを示しております。當時にあっても、当地域が中央の勢力と密接な係りをもっていたことを裏付けているのです。

この度、この一角で水田整備が計画され、これに先立ち発掘調査を実施いたしました。この結果、当時の土師器あるいは県内では類例の乏しい初期須恵器など、貴重な資料が発見されております。本書はその成果の概要をまとめたものでありますが、これが、これら遺跡の保護にわずかでも益するところがあれば幸甚に存じます。

最後に、調査にあたりお世話になりました、地元・土地改良区の方々、富山県埋蔵文化財センターはじめ関係各位に、深く感謝の意を表するしだいです。

1987年3月31日

小矢部市教育委員会

教育長 岩峯 敏正

## 目 次

第1章 調査の経過.....	1
第2章 道林寺遺跡の位置と環境.....	3
1. 位 置.....	3
2. 周辺の遺跡.....	3
第3章 既応の調査.....	7
第4章 発掘調査.....	9
1. 調査区の設定.....	9
2. 各調査区の概要.....	9
3. 遺 物.....	13
第5章 まとめ.....	17
1. 古墳時代の土器.....	17
2. 古墳の変遷.....	21
註・参考文献.....	22

## 図 版 目 次

- 図版 1 道林寺遺跡 上：空中写真（昭和43年撮影）  
                  下：空中写真（昭和58年撮影）
- 図版 2       〃 上：調査区全景（北西から）  
                  下：C区の調査状況（西から）
- 図版 3       〃 上：A区全景（西から）  
                  下：B区竪穴状遺構（北から）
- 図版 4       〃 上：B区土括（南東から）  
                  下：B区土括の層位（北から）
- 図版 5       〃 上：C区全景（西から）  
                  下：D区全景（西から）
- 図版 6       〃 上：E区全景（西から）  
                  下：F区全景（西から）
- 図版 7       〃 上：B区北壁の層位  
                  下：C区北壁の層位
- 図版 8       〃 上：D区北壁の層位（溝）  
                  下：E区北壁の層位

図版9 道林寺遺跡出土遺物 1.墨青土器（C区）2.須恵器（E区）3.打製石斧（C区）

4.打製石斧（E区）5.砥石（E区）

図版10 道林寺遺跡（昭和49年調査） 上：調査区全景（西から）

下：第1号住居跡付近（北東から）

図版11〃（〃） 上：第1号住居跡（南西から）

下：第1号住居跡（北西から）

図版12〃（〃） 上：第2号住居跡（東から）

下：第2号住居跡（南から）

図版13〃（〃） 上：第3号住居跡（北西から）

下：第3号住居跡（北東から）

図版14〃（〃） 上：第4号住居跡（東から）

下：第5号住居跡（北から）

図版15〃（〃） 上：穴0-1（南西から）

下：溝0-5（南から）

## 挿 図 目 次

第1図 調査位置	3
第2図 遺跡の位置と周辺の古墳群（ $\frac{1}{25,000}$ ）	4
第3図 調査位置と周辺の地形（ $\frac{1}{25,000}$ ）	5
第4図 道林寺遺跡遺構測量図（ $\frac{1}{200}$ ）	8 ~ 9
第5図 道林寺遺跡各調査区の上層断面（北壁）（ $\frac{1}{20}$ ）	11
第6図 道林寺遺跡各調査区出土弥生土器・土師器・須恵器（ $\frac{1}{4}$ ）	14
第7図 道林寺遺跡（E区）出土砥石（ $\frac{1}{2}$ ）	15
第8図 道林寺遺跡（各区）出土須恵器・土師器	15
第9図 道林寺遺跡（各区）出土土師質上器・天目茶碗（ $\frac{1}{2}$ ）	16
第10図 道林寺遺跡第3号住居跡出土土師器（ $\frac{1}{4}$ ）（昭和49年調査）	18
第11図 道林寺遺跡第3号住居跡出土土師器（ $\frac{1}{4}$ ）（昭和49年調査）	19
第12図 道林寺遺跡第1号住居跡出土土師器（ $\frac{1}{4}$ ）（昭和49年調査）	20
第13図 道林寺遺跡出土初期須恵器（ $\frac{1}{4}$ ）（昭和49年調査）	20
第14図 道林寺遺跡第1号住居跡出土土師器（ $\frac{1}{4}$ ）（昭和49年調査）	21
道林寺遺跡周辺（昭和61年撮影）	2
竹倉島遺跡遺物出土状況	6
道林寺遺跡第3号住居跡の遺物出土状況（昭和49年調査）	7

## 例　　言

1. 本書は富山県小矢部市教育委員会が昭和61年度に国庫補助事業として実施した小矢部市道林寺69、70、73番地所在の道林寺遺跡の発掘調査の概要を報告するものである。
2. 調査は富山県埋蔵文化財センターの協力を得て小矢部市教育委員会が実施した。
3. 遺物整理、実測、製図、写真撮影等は小矢部市教育委員会関係者がこれにあたった。但し、昭和49年調査時の遺構実測図、写真及び遺物実測図の一部は富山県埋蔵文化財センターより提供をうけた。
4. 発掘調査及び本書の編集・執筆は小矢部市教育委員会社会教育課主任伊藤隆三がこれにあたった。
5. 本文中( )内、アルファベットで示したものは本年度調査区名を示している。
6. 著・参考文献は本文の最後に一括し、本文中ではその番号のみでこれを示した。
7. 調査の開始から終了まで地権者、南部土地改良区関係者の方々はじめ地元壇生地区の皆様には大変お世話になった。次にお名前を記し厚くお礼申し上げる。

南　金三、北口信作、島崎　弘（以上地権者）、竹倉政一（南部土地改良区理事長）、藤田新良（南部上地改良区工区長）の各氏。　福島勇悦、長井　坤、吉田健治、南　政雄、藤永長作、前川正雄、松谷良吉、吉田克三、藤田きは子、福塚歌子、池田　操、福島たつい子、佃　芳子、吉田ゆき、南　玲子、細井ゆき、長片みや子、松井たま、沼田信子、沼田　節、長谷川たまみ、家山文子、家山幸子、松谷すず子、吉田渡紀子、山田信子、中田なつ子の各氏。
8. 調査にあたっては安念幹倫（富山県教育委員会文化課派遣文化財保護主事）、小田木治太郎、山崎典子、春日真美（以上 富山大学人文学部考古学研究室学生）の各氏ほかの協力を得た。記して謝意を申し上げる。
9. 調査から本書の作成にいたるまで、昭和49年の発掘調査を担当された上野　章、岸本雅敏（富山県埋蔵文化財センター主任）両氏をはじめ、センター職員の方々から多くの御教示を得た。記して厚くお礼申し上げる。
10. 出土遺物は小矢部市教育委員会が一括して保管している。

## 第1章 調査の経過

小矢部市埴生南部地区の土地改良事業は昭和48年に着手し、昭和51年完了の予定で進められてきた。昭和49年からは、これに伴なう遺跡の発掘調査が、事業に先行するかたちで開始された。もとより遺跡の多いことで知られていた地域であり、調査と工事との調整は難行した。しかし、文化財保護行政側の努力と地元の理解とによって、発見された遺跡の多くは計画田面高の変更などにより破壊をまぬがれ、地下に保存されることとなったが、調整のつかなかつた一部については、記録保存のための調査を年次を追って実施している。昭和49年度には道林寺1遺跡、樋掛遺跡、蓬沼遺跡の調査が、昭和50年度には道林寺Ⅲ遺跡、道林寺Ⅳ遺跡、竹倉島遺跡の試掘調査が、また昭和51年度に日の宮遺跡、昭和52年度に竹倉島遺跡の調査が行なわれている。道林寺遺跡（道林寺I～IV遺跡を統合）は、昭和49年度に東西に走る農道予定地についてのみ記録保存が行なわれているものの、その大半は田面高調整により保存されることになった。農道より南側については、保存措置がとられたものの、不整形な水田として残される形となつたのである。地権者の方々三名は農作業上の不便を訴えられ、この度自家用を整形田に整備する計画をたてられ、当該遺跡の保護措置について市教育委員会に協議を申し出てこられた。市教育委員会では、県教育委員会文化課及び同埋蔵文化財センターと協議を重ね、昭和61年度にその遺構等の遺存状況、正確な範囲等を把握するため、対象面積約3,300m<sup>2</sup>に対し発掘調査を実施することとしたのである。調査は稲の刈り取りを待って行なうこととしたが、種々の事情から遅延し、表土の排除作業に着手したのは昭和61年11月27日、調査完了は12月20日である。以下調査日誌（抄）を記しておく。

### 調査日誌（抄）

- 10月17日(金) 現場事務所設営
- 11月18日(土)～19日(日) 発掘調査器材の搬入
- 11月22日(木) 調査杭設置
- 11月25日(日) 標高の移動（北陸高等専門学校水準点37.825mより移動）
- 11月26日(月) トレンチ位置設定
- 11月27日(火) 表土、盛土の排除作業開始（重機械使用）。A区140cm掘り下げ。旧表土に達しない。
- 11月28日(水) 本日より作業員入る。A・B区清掃・遺構検出作業、C区、D区表土、盛土の排除作業。B区上坡の掘り下げ開始（径3.5mの円形）。
- 12月1日(木) D区遺構検出作業開始。昭和49年調査時のトレンチ確認。D区盛土排除作業。
- 12月2日(金) D区溝の掘り下げ。遺物若干。B区土壤掘り下げ。遺物なし。重機械による作業完了。
- 12月3日(土) B区上層の掘り下げ。D区溝の掘り下げ。県教育委員会文化課、同埋蔵文化財セ

ンターより現地視察。

- 12月5日(木) C区の掘り下げ。包含層より縄文土器、弥生土器、土師器など出土。D区清掃後写真撮影。
- 12月6日(金) C区包含層より土師器など。A・B区清掃後写真撮影。
- 12月8日(日) F区、C区掘り下げ。本日より遺構平面図作成開始。
- 12月9日(火) F区遺構掘り下げ。遺構平面図作成、土層断面図作成準備。
- 12月10日(水) C区、F区写真撮影。E区掘り下げ。
- 12月11日(木) E区掘り下げ。F層より土師器、石斧1点、砥石1点。
- 12月12日(金) E区黒色土下層より初期須恵器。
- 12月13日(土) 土層断面図作成(B区)
- 12月16日(火)〃
- 12月17日(水)〃 平面図作成。土層断面写真撮影。
- 12月19日(金)〃 (C区)
- 12月20日(土) 土層断面図作成完了。本日にて調査終了。



道林寺遺跡跡周辺（昭和61年撮影）

## 第2章 道林寺遺跡の位置と環境

### 1. 位置（第1図）

小矢部市は富山県最西部にあり、庄川が形成した広大な扇状地の西部域を占めている。北方を能登半島基部宝達丘陵に連なる丘陵地、南方を医王山北麓を占めるなだらかな蟹谷丘陵地、西方を加越国境線をなす砺波山丘陵地によって限られている。東方には散居村で著名な砺波平野が展開し、遠く呉羽山丘陵、北アルプスを望むことができる。市域中央には各丘陵地より流れ出る中小河川の流れを集め、小矢部川が北流している。この左岸一帯は河岸段丘が発達し、河川の氾濫から逃れられる比較的安定した地勢を形成している。このため段丘上では多くの遺跡がみつかっており、市域だけでも現在160余ヶ所を数えるに致っている。その集中度は高く、小矢部川左岸遺跡群と呼称しても差し支えない程広く、濃密である。

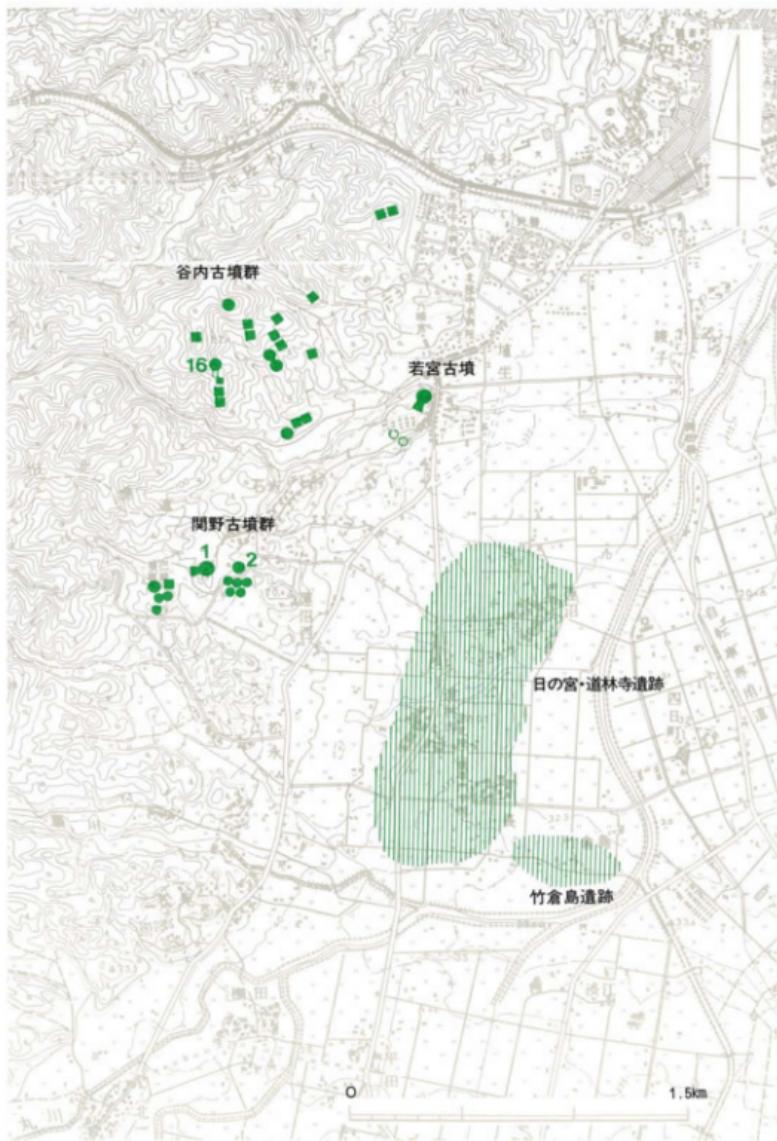
蟹谷丘陵地に源を発する渋江川は、五郎丸川、砺波川など小河川を吸収し、やがて小矢部川へ合流する。この左岸段丘上に遺跡は立地する。道林寺遺跡は昭和49年に圃場整備事業に先立って発掘調査が実施されており、道林寺I～IV遺跡とされていたものを、これ以降実施した分布調査の結果に基づき統合した名称である（今回の調査地点は道林寺I遺跡にあたる）。一帯は遺物の分布が濃密で、道林寺遺跡群はもとより、北接する日の宮遺跡、蓮沼遺跡あるいは東方の樋掛遺跡などの区分も困難な状況にある。

### 2. 周辺の遺跡（第2図）

昭和49年から52年までの間に圃場整備事業に伴い実施された発掘調査、或いは、昭和54年から59年まで実施した分布調査などにより、周辺の遺跡の状況はある程度把握されている。日の宮遺跡（昭和51年調査）からは旧石器時代（細石核）、縄文時代（後・晚期）、弥生時代（後期）、律令期及び中世の遺物が出土している。ことに中世の遺構、遺物が最も多い。中世において守護代遊佐氏の居城でもあった蓮沼城址は遺跡北西部にあたるが、その周辺には蓮沼三千軒とも称される城下集落が形成されていたとされる。発掘された該期の遺構、遺物の多くがこれに係るものであろう。このほか樋掛遺跡（昭和49年調査）からは弥生時代中期の土器と方形周溝墓が発掘されている。この日の宮、道林寺遺跡西方、砺波山丘陵の麓に松永遺跡、福田遺跡がある。分布調査により発見されたもので、松永遺跡からは墨書き土器、円面鏡など、福田遺跡からは布目瓦（平瓦）など律令期の遺物が採集されている。この背後の丘陵地には7世紀後半から8世紀前半代にかけての窯跡群が知られている。この窯跡群は7世紀第3四半期に属する西蓮沼窯跡



第1図 調査位置



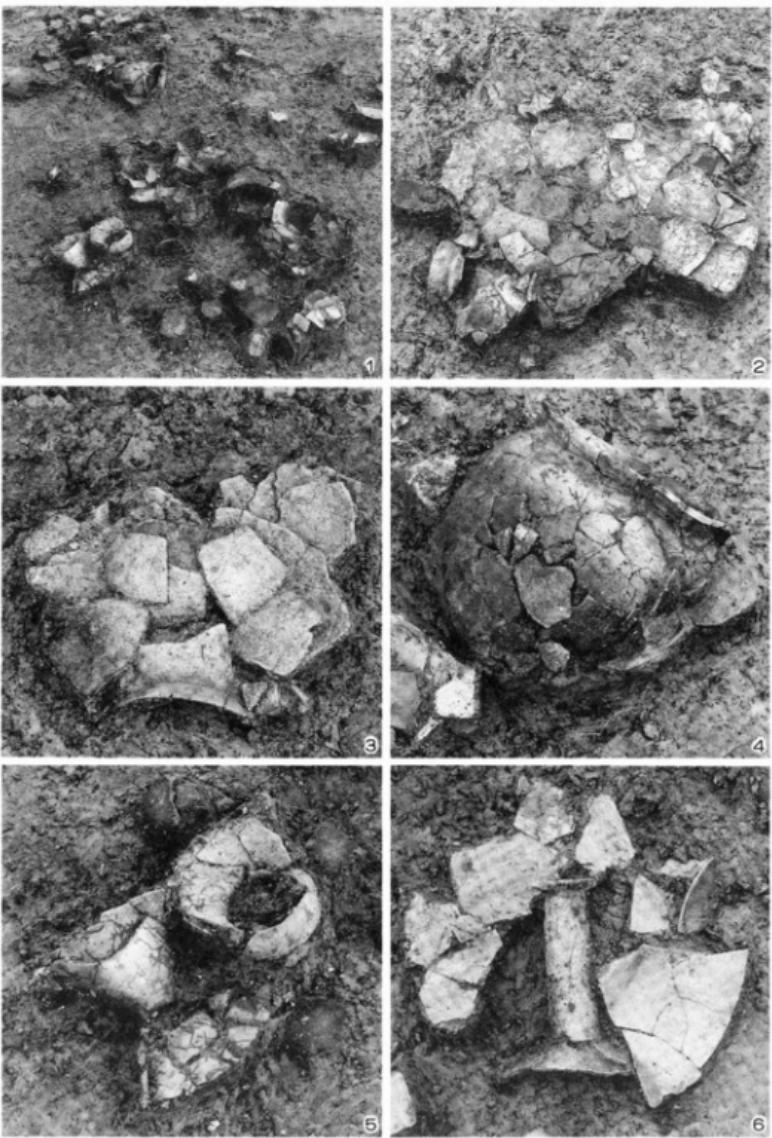
第2図 道林寺遺跡の位置と周辺の古墳群 (1/25,000)

を最古とし、7世紀末の瓦陶兼業窯である蓮沼新堤窯跡、山王奥堤窯跡へ、さらに8世紀前半の松永2号窯跡、松永1号窯跡などへとつづく、総数7基よりなっている。松永、福田遺跡とともに律令期の中核的遺跡群を形成している。

道林寺遺跡は後述するように5世紀後半代の集落跡を中核とする遺跡である。これと相前後する時期の遺物を出土している竹倉島遺跡、それと古墳の分布について触れておきたい。竹倉島遺跡は昭和52年の発掘調査で、6世紀代の遺物を出土し、道林寺遺跡に後続する時期の遺跡として知られていたが<sup>5</sup>、昭和62年の調査でその下層より古墳時代前期にさかのばる土器群が発掘された。調査地点は昭和52年調査地点より南東へ約150mで段丘縁辺に近いところである。溝、土塙などを検出している。住居跡はみつかっておらず、居住域からは、ははずれているようである。この溝下層から発掘した遺物には、小型器台、小型丸底壺、内面肥厚のくの字口縁の甕などを含んでおり、布留式土器の影響をうけた土器群であることを示している。<sup>6</sup>付近に道林寺遺跡に先行する集落が存在することを暗示している。これによって前期から後期にかけての遺物が一応連続性をもったことになる。また古墳は道林寺遺跡西方の丘陵地に総数36基営まれている。北より野端古墳群（3基、消滅墳2基を含む）、谷内古墳群（20基）、若宮古墳、関野古墳群（7基）、葵塚・巴塚古墳群（5基）である。昭和60年より実施している古墳の総合調査により、その古墳の変遷が明らかとなりつつある。谷内古墳群は弥生時代終末以来の墳墓群<sup>7</sup>と考えられ、以後関野1号墳（前期前方後円墳）、同2号墳（中期円墳）、若宮古墳（中期末前方後円墳）へと推移していく。集落と古墳の実態が徐々に明らかになってきているといってよいだろう。



第3図 道林寺遺跡の調査位置と周辺の地形(1/20,000)



竹倉島遺跡遺物出土状況

### 第3章 既応の調査

道林寺遺跡に調査の手が加えられたのは、昭和49年に圓場整備事業に伴い県教育委員会が実施した発掘調査<sup>文獻1</sup>である。試掘坑は対象地全域にもうけられているが、遺構の状況を伺い知ることが出来るのは農道建設部分について行なわれた、幅約9m、延長約100mの本調査区城についてのみである。この調査区から、竪穴住居跡5基をはじめ、溝、土塙などの遺構が検出され、弥生時代後期・古墳時代中期・後期、律令時代及び中世に至るまでの夥しい量の遺物が発掘されている。検出された遺構の大半は古墳時代中期のものである。竪穴住居跡のほとんどが古墳時代中期に属するものと思われる。本年度の調査区からあらたに竪穴住居跡が検出されていないことからすれば、ほぼ当時の居住域の南端をとらえているといつてもいいようである。

第1号住居跡は調査の最も西に位置し、一辺約7mの隅丸方形を呈する。ここからは弥生時代後期・古墳時代中期～後期の土器を、そして陶邑縫年高藏（TK）216型式の須恵器杯蓋1点を出土している。なかでも古墳時代中期の土器が最も多く、布留式土器の影響を残す甕、小型丸底壺、高杯、楕形土器などがある。第2号住居跡は規模は不明ながら、やはり隅丸方形となる。炭化木材が多数出土しており、火災により消失したものと思われる。弥生時代後期・古墳時代中期の土器が多い。弥生後期の土器には、甕、壺、器台など、古墳時代中期の土器にはやはり甕、高杯、楕形土器などがある。ここからはTK73型式の初期須恵器が1点出土している。第3号住居跡は調査区東方にあり、南東至近の位置に第5号住居跡がある。ほぼ全形を伺い知ることが出来、一辺約7mを測る方形である。ここからは弥生時代後期の遺物を若干含むものの、古墳時代中期の土器が一括投棄された状況で検出されている。後にやや詳しく触れるが、各種の甕、壺、高杯そして楕形土器が多量に出土している。また

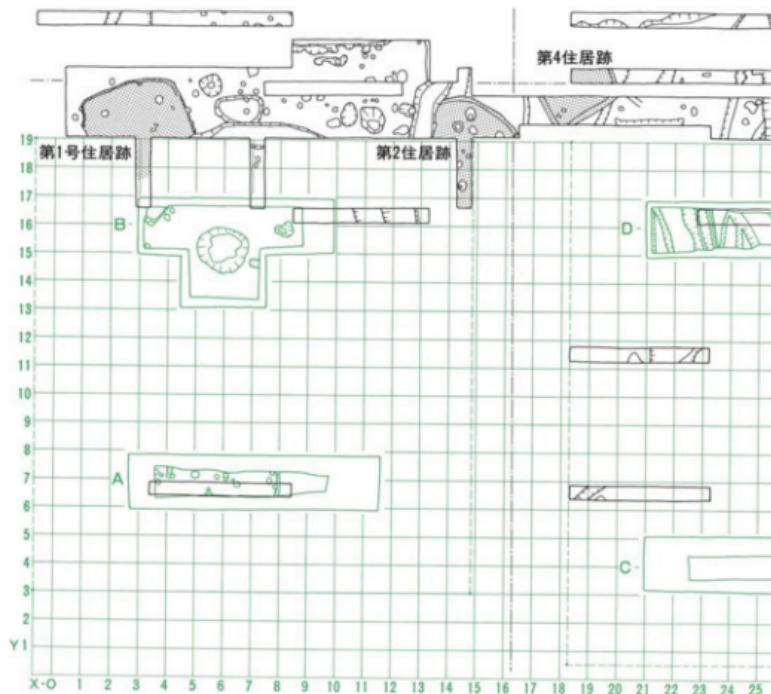


TK216型式縁口縁部など

道林寺遺跡第3号住居跡の遺物出土状況（昭和49年調査）

も出土している。第4号住居跡は第2号住居跡の北東、第3号住居跡との間にある。一辺約5m程の比較的規模の小さいものである。調査面積が狭いため全形を知り得ない。遺物の量は少いが、古墳時代中期を中心とする。第5号住居跡は第3号住居跡の南東にある。全形を知り得る唯一のもので、一辺約7.5m。やはり弥生時代後期の混入品が若干あるが、ほぼ古墳時代中期の土器で占められている。このほかの出土品に、滑石製紡錘車、緑色凝灰岩製紡錘車の未製品（第3号住居跡）、勾玉（第5号住居跡）、砥石（第1号・第3号住居跡）があり、この集落は玉造りを行なっていた可能性が高い。今回の調査でも、第3号・第5号住居跡の南方の調査区（E区）で筋砥石が1点出土している。

中世の遺構・遺物も若干検出されている。遺構は小規模な溝、穴などである。出土品には土師質小皿（灯明皿）、珠洲焼、石製の硯などがある。当遺跡北方の日の宮遺跡と関連するものと考えられる。

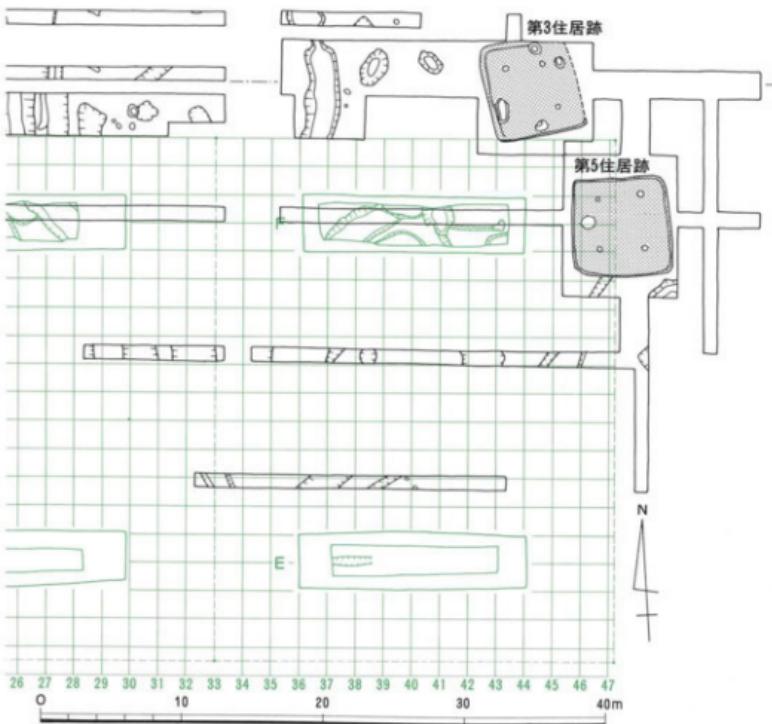


第4図 道林寺遺跡

## 第4章 発掘調査

### 1. 調査区の設定（第4図）

発掘調査は昭和49年調査時の調査区南側について行なった。目的は遺構の遺存状況、正確な範囲の確定である。今回の調査区を、当時の調査区と出来るだけ正確に合わせる必要があったため、当時のトレンチの位置を確認する目的で、旧調査区X-55（東西方向）ライン付近に西よりB、D、Fの各調査区をもうけた。さらに、遺跡の広がりを確認するために、調査区南端に近い位置に西よりA、C、Eの各調査区を設定した。各調査区は幅4m、長さ14~18mである。B区では土塙平面の確認のため南側に4×5mの拡張区をもうけた。総面積約120m<sup>2</sup>である。いずれの地点も、土地改良事業施行時に70~80cm前後の盛土を行なっていることが判って



遺構測量図 (1/400)

いたため、耕作土及び盛土の排除には重機械を使用した。

## 2. 各調査区の概要（第4・5図）

A区は調査区南西隅にもうけた。幅4m、長さ約17mである。耕作土、盛土の厚さは西側で約65cm、東側で約90cmである。旧表土下約40cmで灰黒色の遺物包含層に達する。地山は西から東へ傾斜しており、西側で表土下約1.2m、東側で同じく約1.9mを測る。調査区西側で、小規模なピット群を検出した。その性格は不明であるが、深さ30~50cm程の比較的深いものがいくつかみられ、これらは柱穴となる可能性もある。盛土中より、手づくね土器、高杯脚部（古墳時代中期）、土師質小皿、天目茶碗などが、ピット中より脚台が出土している。

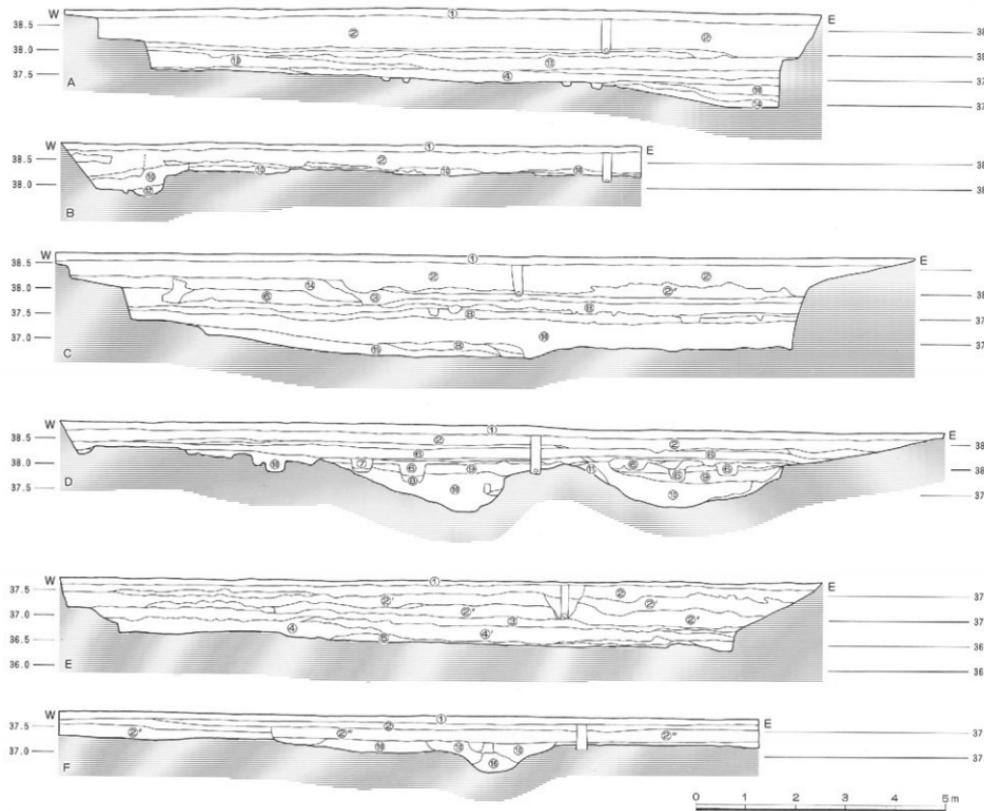
B区は調査区北東部、第1号住居跡の南側にあたる位置に設定した。幅4m、長さ約14mである。但し、調査区中央南側で土塙が検出されたため、全形確認のため4×5mの拡張区をもうけた。西北の隅で、昭和49年当時のトレンチを確認している（10調査区Y55ライン上）。

耕作土、盛土は比較的うすく平均75cm程である。旧表土、遺物包含層は残されておらず、盛土直下が黄褐色砂質の地山となる。調査区北西隅で竪穴状の落ち込みを検出したが性格不明。調査区中央南側で検出された直径約3.5m、深さ約80cmの円形土塙は、土塙中央に地山の逆転現象がみられ、倒木痕の類かと思われる。ここから遺物は出土していない。これ以外にも小規模なピットを検出している。遺物はわずかで、土師器甕口縁部（古墳時代中期）など、また、律令期の須恵器有台杯が出上している。

C区は調査区中央南側にもうけた。幅4m、長さ約18mである。表土、盛土の厚さは西側で約70cm、東側で約80cmである。旧表土下約50cmで黒色粘質の良好な遺物包含層に達する。この包含層は比較的厚く、西で25cm、中央で約80cm、東側で約70cmを測る。地山はやや西から東へ傾斜し、調査区ほぼ中央より東は水平である。地山までの深さは西で約164cm、東で約180cmである。遺構は検出されていない。遺物は包含層から打製石斧、縄文時代後期（前田式）の土器片、弥生時代後期の土器、土師器甕、高杯、椀形土器（古墳時代中期）、律令期の墨書き土器（土師器・底部外面に「郡」字文字）、土師質小皿がある。

D区は調査区中央北側に設定した。昭和49年調査時に第4号住居跡、溝04、穴05~08が検出されたすぐ南にあたる。幅4m、長さ約18mである。調査区中央で旧トレンチを確認した。耕作土・盛土の厚さは比較的浅く平均約40cmである。約20cmの遺物包含層の下で大小の溝が検出された。中央で検出された比較的大きな溝は幅約2m、東側で検出されたものは推定幅約3mを測る。溝04と方向が一致する。この溝と切り合い関係をもつ小規模な溝（幅35~50cm、深さ25~35cm）が5~6本あるが、いずれも大溝が完全に埋没した後切り込まれている。遺物包含層及び各溝などからは、弥生時代後期の甕、壺、古墳時代中期の土師器甕、高杯、椀などが、律令期の須恵器有台杯、土師質小皿などが出土している。

E区は調査区南東隅、C区の東方にもうけた。幅4m、長さ約16mである。耕土、盛土の厚さは西側で約60cm、東側で約85cmを測る。旧表土直下で灰黒色粘質土の遺物包含層に達する。



第5図 道林寺遺跡各調査区の土層断面(北墓)(1/80)

厚さ30cm前後ではほぼ水平に堆積する。地山はやや東へ傾くがほぼ水平に近い。地山までの深さは西側で約105cm、東側で約136cmである。調査区中央を東西に、幅30~50cmの浅い溝が検出されている。遺物は包含層より、弥生時代後期の甕、器台、古墳時代中期の土師器（甕・高杯）、須恵器（壺口縁部）、土師質小皿、そして打製石斧、砥石が各1点出土している。

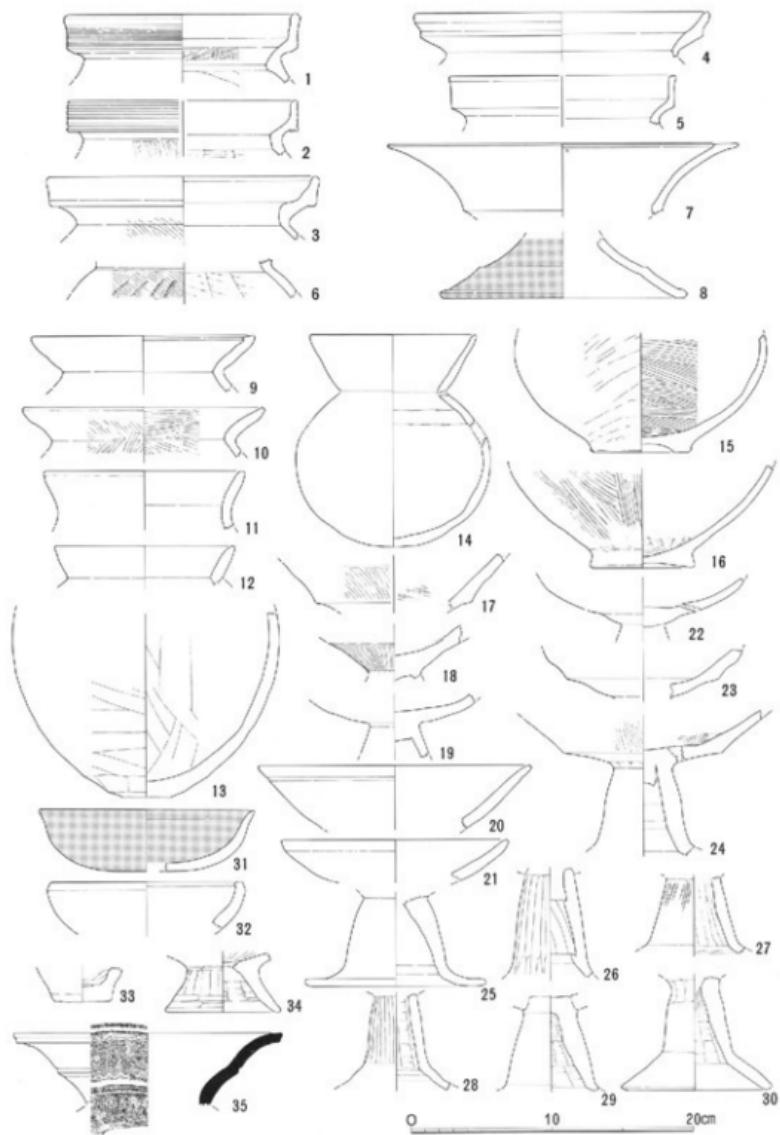
F区は調査区北東隅、昭和49年調査の第3号住居跡、溝05、穴09・11の南、第5号住居跡の西側にあたる。幅4m、長さ約16mである。耕作土、盛土の厚さは48cmである。盛土直下がほぼ地山である。幅2.5m、深さ75cm程の溝が南西→北東方向で検出されたほか、土塙などが見つかっている。遺物には、古墳時代中期の甕、高杯、碗、後期の須恵器がある。

昭和49年の調査結果および今回の調査結果から、遺跡は砺波山丘陵方向より延びる微高地上有り、今回の調査地点はその南側斜面にあたると思われる。ここから住居跡などは検出されておらず、旧調査地点が古墳時代中期の居住域のほぼ南限であると思われる。D・F区で検出された溝は北方より流れ、この斜面のいずれかで消失しているものと思われる。A・C・Eの各調査区では南北に通る溝は検出されていない。遺物包含層は調査区南側の各トレンチで良好に遺存しているが、縄文時代後期、弥生時代後期、古墳時代中期、律令時代、中世の遺物が、ほぼ同一の包含層から出土している。このため各資料は一括性に乏しい。

### 3. 遺物（第6・7・8・9図）

各調査区からは、縄文時代後期（前田式）の土器片、弥生時代後期から古墳時代中期の土師器、須恵器、同後期の須恵器、律令期の土師器、須恵器、中世の土師質小皿、天目茶碗などのほか打製石斧、砥石など石器がある。C・D区からの出土が多い。

弥生時代後期から古墳時代中期までの土器を第6図にあげた。主体を占めるのは古墳時代中期の土器で、同図9~13、15~35がこれにあたる。9(B)は口唇部内面が肥厚するくの字口縁の甕である。この一群のなかではやや先行するもので、26(C)、28(F)、30(C)など、高杯の一部が伴うものと思われる。昭和49年度調査時の遺物では第1号住居跡、第2号住居跡、第4号住居跡出土品中にわずかながらみられる。これ以外はほぼ第3号住居跡出土品に類似するものが多い。10(E)、11(D)、12(C)はゆるやかに外反するくの字状口縁の甕で体部はやや削長となるものである。調整は全体に荒く、10などは器壁外面、口縁部内面に荒い刷毛目を残している。内面ヘラ削りは不徹底で器壁は厚い。13(C)は甕体部下半で、内外面ともに荒いヘラ削りを施す。底部は小さな平底状となっている。胎土には大粒の砂粒を含み荒い。高杯は基部よりやや八の字状に開く脚部を有するもので、杯部は棱を有するもの、棱をもたないもの、椀状となるものがある。17(D)、18(D)、24(E)は比較的明瞭な棱を残す個体で、器壁外面、受部、内面などに荒い刷毛目を残している。22(E)、23(D)では棱は不明瞭なものとなっている。20(C)は口縁部付近に浅い沈線を一条めぐらせており、19(C)は椀形の杯部を有するものとなろう。椀形土器には二種ある。31(D)は口径15cm、器高4.4cm。口縁部がやや外反する。塗彩されている。32(F)は口径13.5cm。口唇部に平坦面を有し、若干内面肥厚している。15(C)・

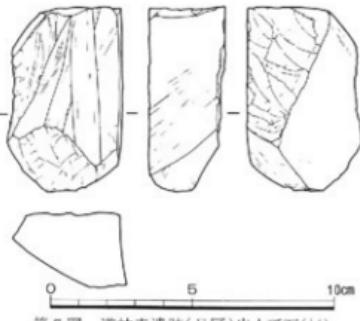


第6図 道林寺遺跡各調査区出土器物・土師器・須恵器(1/4)

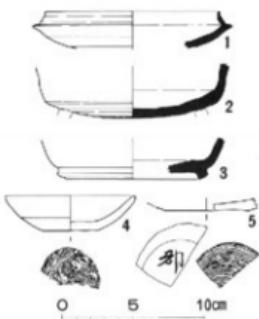
16(C)は楕形土器の一種で体部下半のみ残される。15は体部は内湾ぎみとなっており、第3号住居跡出土品からみて外反する口縁部がつくものと思われる。外面はヘラ削り、後、なで消されている。内面には荒い刷毛調整痕をそのまま残す。底部径は約6cmあげ底である。16はやや大型となるが同種のものであろう。外面は荒い刷毛、内面は刷毛調整のちナデである。33(A)は手づくね土器である。34(A)は脚台である。

外面を磨き上げ、内面にヘラ削りが施されている。35(E)は須恵器壺口縁部片である。頭部よりやや強めに外反する。口縁部径は約19cmと推定される。外面中央に断面三角形の突帯を一条有し、その上下の区画に振幅の小さい、細い櫛描波状文が、上の区画に二帯、下の区画に一帯ていねいに施される。焼成は非常に良く堅緻である。昭和49年の調査では陶邑編年高蔵(TK)73、216型式の、いわゆる初期須恵器が数点発掘されている(第13図)。第1号住居跡南半からはTK216型式の杯蓋(第13図1)、第2号住居跡からはTK73型式の杯底部(同図2)、第3号住居跡からはTK216型式の豚口縁部(同図3)がそれぞれ出土している。今回出土したものも、これらとほぼ同時期のものと考えてよいだろう。同じE区包含層から筋砥石が1点出土している(第7図)。所属時期は不明である。昭和49年の調査では、第1号住居跡と第3号住居跡から、それぞれ1点づつ砥石が出土している。また、第3号住居跡からは緑色凝灰岩製の紡錘車未製品が、第5号住居跡からは勾玉が各1点出土している。これに先立って実施された試掘調査では滑石製紡錘車も1点出土しているのである。当該集落で玉造りが行なわれていた可能性は高いといえる。今回出土した砥石は6.5×3.8cmで、六面が使用されていたことが判る。このうち一面に、それぞれ幅9mm、7mmの2条の溝が残されている。いずれも深さは浅く1mmに満たない。

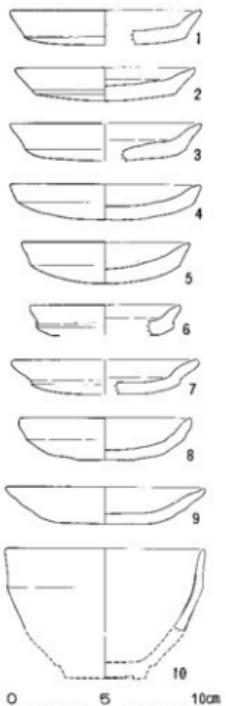
この他、古墳時代以降の遺物を第8図、第9図に示した。第8図1はF区より出土した須恵器杯で、7世紀前半代(TK209～TK217型式)に下降するものである。2(B)、3(D)はいずれも律令期の須恵器有台杯で、2は高台がはがれている。8世紀代の遺物であろう。4・5は土師器で、いずれもC区包含層より出土している。3はやや内湾ぎみの体部を有する小皿で、口径9cm、器高2.5cmを測る。底部に糸切り痕が残る。5も同じく糸切り底であるが、この底部外面には「郡」の墨書がある。墨書き器は、周辺の律令期の遺跡からも出土している。道林寺遺跡の西方、松永遺跡、南方汎江川をはさ



第7図 道林寺遺跡(E区)出土砥石(1/4)



第8図 道林寺遺跡(各区)出土須恵器・土師器(1/4)



第9図 道林寺遺跡出土上土師  
質土器・大目茶碗(1%)

み対岸にある平田藤森遺跡、西南の棚田遺跡、また、国道8号小矢部バイパス建設に伴い発掘調査を実施している桜町遺跡などであるが、「郡」字を記したものは一点もない。県下でも初出であろう。墨書き土器を出土した遺跡のうち最も近い松永遺跡は、背後の丘陵地に須恵器・瓦の生産遺跡をひかえ、律令期の中核的な遺跡のひとつであるが、この「郡」字墨書きの土器の出土は、道林寺遺跡も含むこの一帯のどこかに、これに係る遺構の存在する可能性を示している。

中世の遺物には、珠洲焼、土師質小皿などがある。珠洲焼はごくわずかであるが、土師質小皿(第9図1~9)はA、C、D、E区などからまんべんなく出土している。図示したものの中、1(D)、5(E)、8(E)、9(C)が遺物包含層からの出土で、他は保存工事の際の盛土中から出土したものである。型押し成形によるものが多く、手づくね成形によるものは9のみである。型押しによる個体のはほとんどは直径10cm程度、器高2cm前後でそろっている。6のみが例外的に小さい。手づくね成形による9は口径15.5cm、器高2cmを測る。D、E区で検出された溝のうち、小規模なものがこの時期に所属する可能性が高い。昭和51年に同じ圃場整備事業に先立って実施された日の宮遺跡は道林寺遺跡北方約700mにある。この遺跡の北西の一角には蓮沼城跡がある。この城下はかつて蓮沼三千軒とも称されるほど繁華であったと伝えられる。

調査地点はこの城下集落の一部にあたると思われ、ことにC地区

文献1

からは多くの遺構、遺物が検出されている。遺構には多数の柱穴、大小の溝11、井戸19(一部近世のものも含む)などがある。遺物には珠洲焼の甕・壺・すり鉢があり、越前焼の甕、土師質小皿など、施釉陶器に青磁・白磁・天目茶碗など、石製品に石臼、ばんどこ(火炉)、石硯など、金属製品に鉄製鍋がある。また木製品には見るべきものが多く、漆塗の椀、小皿、根来塗の皿、春慶塗の折敷、曲物、桶、箸、下駄、鋤、ひしゃくなど多種多様である。蓮沼城は15世紀から16世紀にかけ、越中守護代遊佐氏の居城となり、あるいは佐々成政の軍事拠点となってきた。これに伴い城下は発展し、先述の如き活況を呈することとなつたのである。しかし天正13年(1585)、加賀前田勢の攻撃をうけ城下は壊滅するのである。発掘調査によって得られるこれら中世の遺構、遺物の多くが、この当時のものとしてよいだろう。昭和49年の調査及び今回の調査で、道林寺遺跡からも日の宮遺跡と同様の資料を、わずかとはいえたわけであるが、このことは遺跡の範囲が少なくとも関川を越え、道林寺遺跡までその一端が及んでいたことを示すものといえるだろう。

## 第5章 まとめ

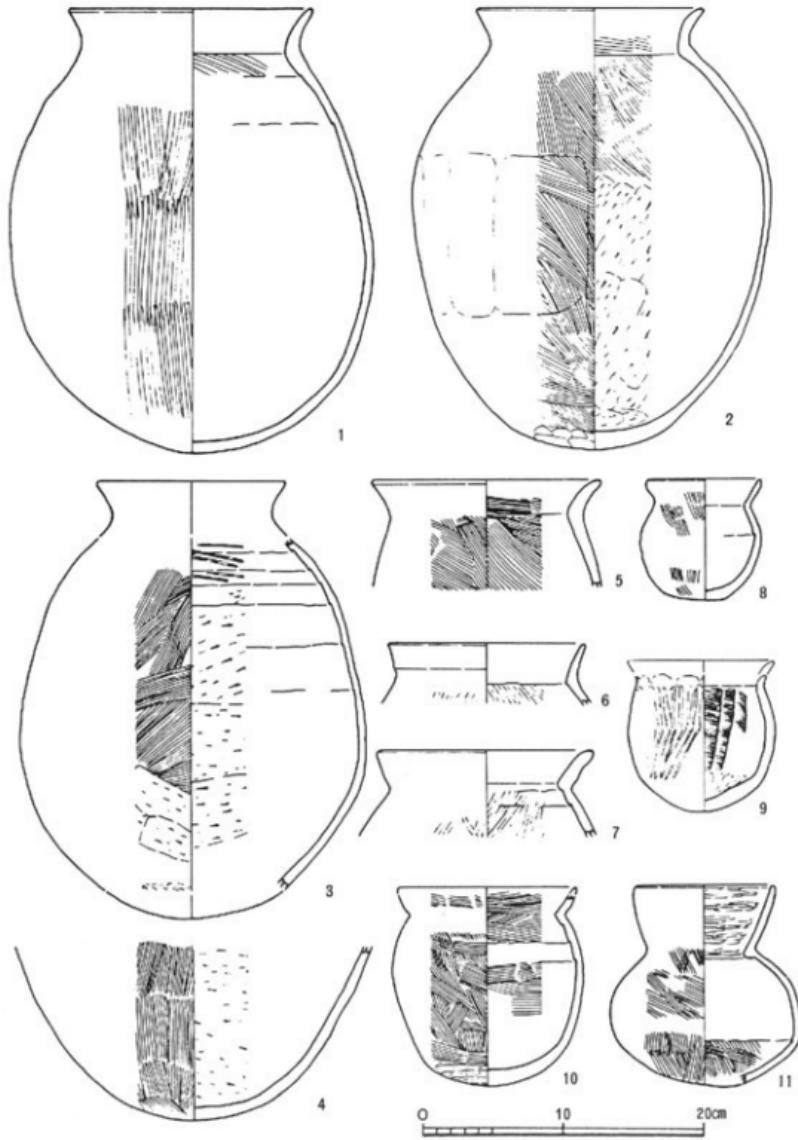
道林寺遺跡は5世紀後半の集落跡を中核とする遺跡である。今回の調査では、溝、土塹など、当該期及び中世に下降すると思われる遺構を検出した。いずれも遺跡の南限を示す遺構と思われる。ここから出土した遺物には、縄文時代後期の土器・石器、弥生時代後期の土器、古墳時代の土師器・須恵器、律令期の須恵器・土師器、中世の珠洲焼・土師質小皿などがある。なかでも、古墳時代のいわゆる初期須恵器の出土は遺跡の年代をより細かく示してくれたし、また、当遺跡のもつ性格の一端を示唆するものとして注意しておきたい。また量的にはわずかではあったが律令期の遺物に「郡」字文字を記した土師器片があり、付近に該期の関連遺構が存在することを暗示しているようである。

ここでは、当遺跡の時期的な中心を占め、出土遺物の量も比較的まとまっている古墳時代の土器を、昭和49年に実施された発掘調査の成果、及び近隣の遺跡の状況もふくめ検討してみたいと思う。

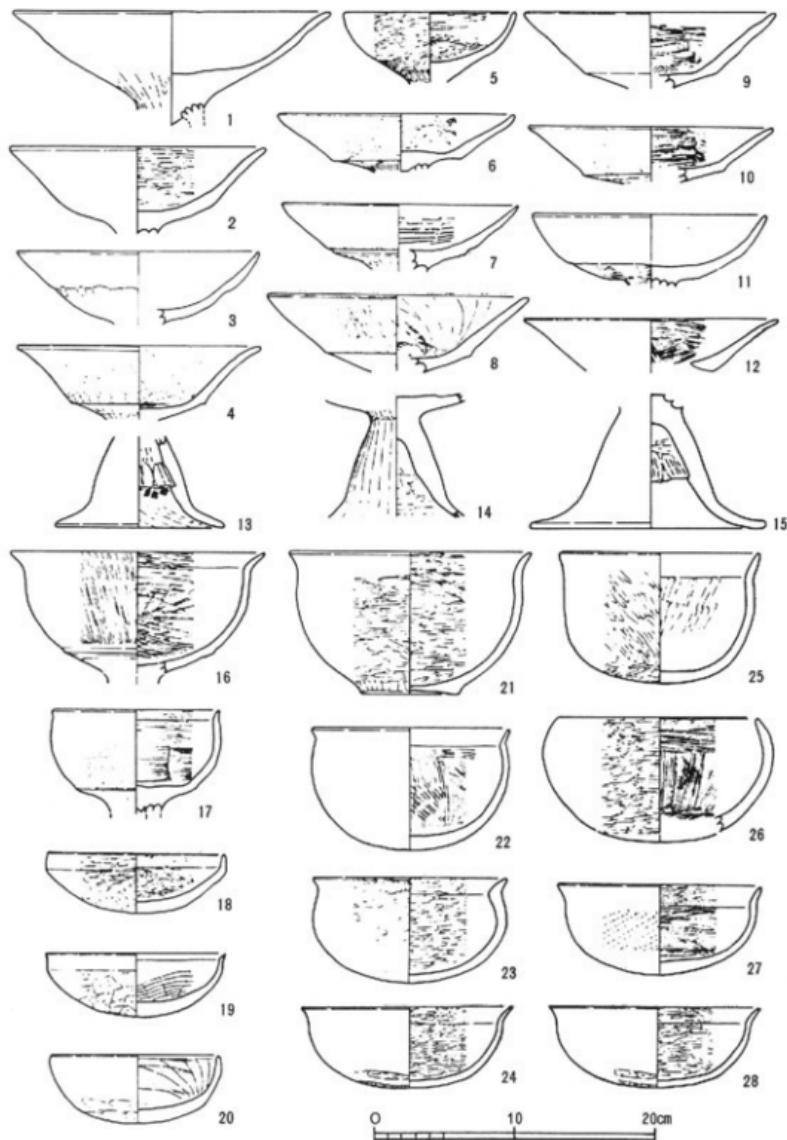
### 1. 古墳時代の土器

昭和49年の発掘調査では、竪穴住居跡(5基)、溝、穴などから大量の遺物が発掘されているが、ここでは、主に住居跡出土品について考えてみたい。しかし各住居跡出土品においても、混入品はかなり多い。このなかでは第3号住居跡出土の土器群が、混入品が比較的小くまとまっており、量的にもめぐまれてるのでこれを中心に記述したい(第10・11・13図)。

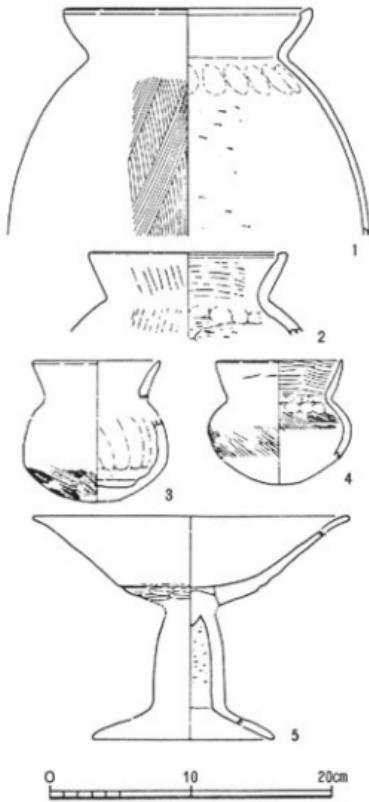
器種には大小の壺、中型の壺、高杯、楕円土器、そして初期須恵器(杯蓋片・口縁部第13図3)がこれに含まれる。壺には器高30cm余りを測る大型品と、14cm程度の小型品などがある。口縁部はくの字状で、ゆるやかに外反する。底部は丸底である。体部外面には縦方向を基調とする荒い刷毛調整痕を残す。内面にはヘラ削り、刷毛調整を施しているが、器壁は厚く、粘土紐の痕跡を残すものがみられるなど不徹底である。体部最大径を中位から下半におき、やや張りを残しているものの全体的には胴長となっている。いわゆる布留系の口唇部内面を肥厚させたくの字口縁をもつ壺はみられない。壺には器高10cm程度を測る中型品がある。器面調整は荒く、体部外面には刷毛目痕をそのまま残している。高杯には杯部に棱を残すものと、残さないものがある。また、楕円土器に脚を付けたものがあり、これには口縁部が内湾するものと、内湾する体部に外反する口縁部を付けたもの(第11図16)の二種がある。後者は台付鉢と呼称したほうが適格かもしれない。これと同種のものが、ほぼ同期のものでは宮山市境野新遺跡から出土している。<sup>文献9</sup> また、後続する時期のものとしては道林寺遺跡東方に隣接する竹倉島遺跡(6世紀代)<sup>文献5</sup> から出土している。しかし、管見の限りではこれ以外に類例がなく、また先行する時期の遺物にもみられない。この時期に出現した当地域特有の遺物といってよいかもしれない。類例を待ちたい。脚部は、柱状のものはなく、基部より八の字状(あるいはやや丸味をもちながら)に開



第10図 道林寺遺跡第3号住居跡出土土師器（1/4）（文献1）



第11図 道林寺遺跡第3号住居跡出土土師器(1/4)(文献1)

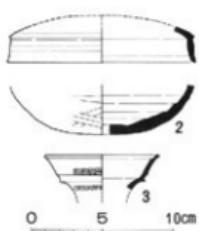


第12図 第1号住居跡出土土器（文献1）

註3・文献11

存在する。高杯には膨らみをもつ脚柱を有するものがある。漆11～12群土器に類似する。また、同住居跡からは後出るとされる内面黒色処理の楕形土器が出土している（第14図）。

今回出土した土器（第6図9～35）も、昭和49年調査時の成果からみた年代を大きく出るものではない。口唇部内面肥厚のくの字口縁甕（9）、柱状脚の高杯（26・28・30など）、壺（14）などは第3号住居跡に先行する一群、他は大半が第3号住居跡とほぼ同期のものと考えられる。



第13図 初期須恵器（文献1）さて、道林寺遺跡の東方に隣接する竹倉島遺跡は、昭和52年にや

くものが多くなるようである。楕形土器は量が豊富で、口縁部が内湾、直立、外反するなどの各種があるが、外反するものが目立つ。法量によっても数種に分つことができる。内面を黒色処理したものはない。この楕形土器に、平底のもの（第11図21）が少量存在する。先述の特殊な杯部を有する高杯の杯部と同型で、やはり類例に乏しい資料である。

以上の土器群は、布留系の甕を含まないこと、高杯が前代までの規制が崩れ弛緩した形体をとること、小型丸底甕がみられないこと、多様な楕形土器が使用されるようになっていること、これらに内面が黒色処理されたものが含まれていないこと、そして初期須恵器がこれらに伴うことなどから、この一群に5世紀後半代の年代が与えられて大過ないものと考える。地域はやや離れるが、近年調査研究の進んでいる南加賀<sup>文獻10</sup>小松市漆町遺跡の成果に照らせば、当該土器群は漆13群上器にはばあたるだろう。

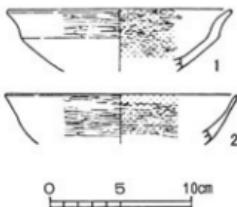
昭和49年の調査では、この3号住居跡土器群に先行、また、後出の土器もわずかではあるが出土している。先行するものは1号住居跡出土土器の一部にある（第12図）。口唇部内面を肥厚させたくの字状口縁部の甕（1・2）があり、また、器壁に刷毛調整痕を残す小型丸底甕（3・4）が

はり圃場整備事業に伴い一部発掘調査されている。この調査では甕、壺、高杯、椀、手づくね土器などが発掘されているが、ここでは道林寺遺跡ではみられない、甕が器種に加わっているし、楕形土器の内面黒色処理されたものが一定量使用されている。出土した須恵器などから6世紀代の年代が与えられる文獻5。道林寺遺跡のものより後出の土器群である。また、昭和62年に実施した同遺跡の調査では、逆に古墳時代前期にさかのぼる土器群がその下層から発掘されている。整理途中のため充分な検討は行なっていないが、これには内面肥厚のくの字口縁甕、小型器台、小型丸底甕が伴っており、布留式影響下の土器群であることは明らかである。これにより、古墳時代の前期から後期にかけ、当該地に集落が営まれていたことが判るのである。

## 2. 古墳の変遷

道林寺遺跡西方丘陵には総数38基の古墳が分布している。その変遷は昭和60年から実施している調査によって、次第に明らかになってきている。現在確認されている最も古い首長墓は関野1号墳である。有茎柳葉形銅鏡約20を出土したことと知られるこの古墳は、昭和61年の調査で推定全長約65mを測る前方後円墳であることが判明し、くびれ部北側より出土した土器は漆9群土器（高昌期）に比定される。現在のところ県下最大の畿内型前期古墳である。関野1号墳の東方約150mの位置に同2号墳がある。直径約30mの円墳で、所属時期については今まで不明な点も多かったが、やはり同年の調査で、これが5世紀前半代の築造であることが判った。埋葬施設から出土した豊富な鉄器類は、その武人的性格をよくあらわしており、地域首長墓としてふさわしいものである。5世紀末～6世紀初頭のころには、前方後円墳が再び首長墓に採用される。関野古墳群西北にある若宮古墳がそれである。昭和60年の調査で全長約50m、陶邑編年高昌（TK）47型式の須恵器、川西編年V期の円筒埴輪を出土している。これらは、道林寺遺跡、竹倉島遺跡などを背景として成長、発展をとげた当該地域首長墓群なのである。

この一帯は小矢部川、洪江川、砂川などの河川によって画された地理的に閉鎖性の強い地域で、比較的遺跡相互の関係が把握しやすいところである。今後の調査で古墳のより細かな変遷が明らかにされ、また集落から出土する土器の細かな分析が行なわれる中で、その実態はより詳細なものとなるだろう。これは、当地域が畿内、或いは他地域の影響を、その強弱はあるにせよ受けながらもその独自性を保持し、いかに発展していったかを解きあかすうえで重要な作業のひとつである。これはまた、律令制下砺波郡として再編されていく当地域の歴史を解明していく上で欠くことのできないものなのである。



第14図 内黒土器（文献1）

## 註

- 現在、遺物の整理中である。機会を得て報告したいと考えている。
- ほぼ同時期と思われる富山市境野新遺跡では須恵器は発見されていない。また、この時期瓶が器種に加わる地域もあるが、当遺跡では検出されていない。
- 石川県辰口町高座遺跡出土品に類似（文献10）。漆12群土器新相とされている。
- 内面黒色処理の土器が一般化するのは、漆町遺跡においては14群土器以降とされる。一方、富山市境野新遺跡（13群土器併行）では、すでに出現するとの指摘がある（文献9）。
- 鉄劍2、鉄刀2、短鉄劍2、鉄鎌20、鉄矛1、その他精緻り・足玉と思われる滑石製小玉 220余個が出土している（文献7）。

## 参考文献

- 1978 上野 章・岸本正敏他『日の宮遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- 1980 小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報（1979年度）』（『小矢部市埋蔵文化財調査報告書（第2冊）』小矢部市教育委員会
- 1981 小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報II（1980年度）』（『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』第6冊）小矢部市教育委員会
- 1982 小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報III（1981年度）』（『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』第7冊）小矢部市教育委員会
- 1983 小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報IV（1982年度）』（『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』第12冊）小矢部市教育委員会
- 1984 小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報V（1983年度）』（『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』第16冊）小矢部市教育委員会
- 1985 小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市遺跡地区・古墳』小矢部市教育委員会
3. 1987 北陸古瓦研究会『北陸の古代寺院』桂書房
4. 1981 西井龍儀・伊藤隆三『富山大学考古学講話会第19回発表資料』
5. 1978 山本正敏他『竹倉島遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会
6. 1986 小矢部市古墳発掘調査団『若宮古墳』小矢部市教育委員会
7. 1987 小矢部市古墳発掘調査団『関野古墳群』小矢部市教育委員会
8. 1984 古岡康暢『北陸地方』『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る—』柏書房
9. 1974 藤田富士夫・橋本正春『境野新遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
10. 1986 田嶋明人他『漆町遺跡I』石川県埋蔵文化財センター
11. 1978 中島俊一他『高座遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会
12. 1940 早川莊作『越中に於ける弥生式文化の遺物に就きて』『富山県史蹟名勝天然記念物調査（会）報告』第14輯
13. 1966 田辺昭二『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ
- 1981 田辺昭三『須恵器大成』角川書店
14. 1978 川西宏幸『円筒埴輪紹論』『考古学雑誌』第64卷第2号 日本考古学会

# 図 版



空中写真（昭和43年撮影）



空中写真（昭和58年撮影）



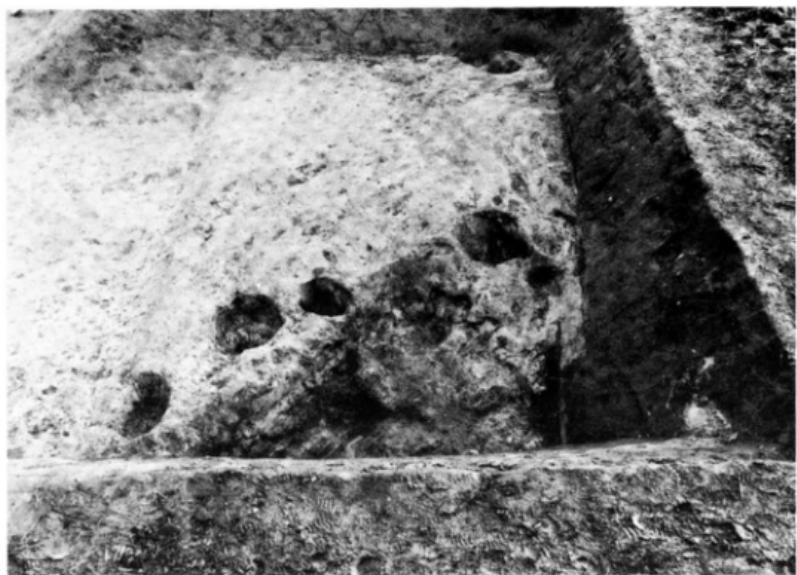
調査区全景（北西から）



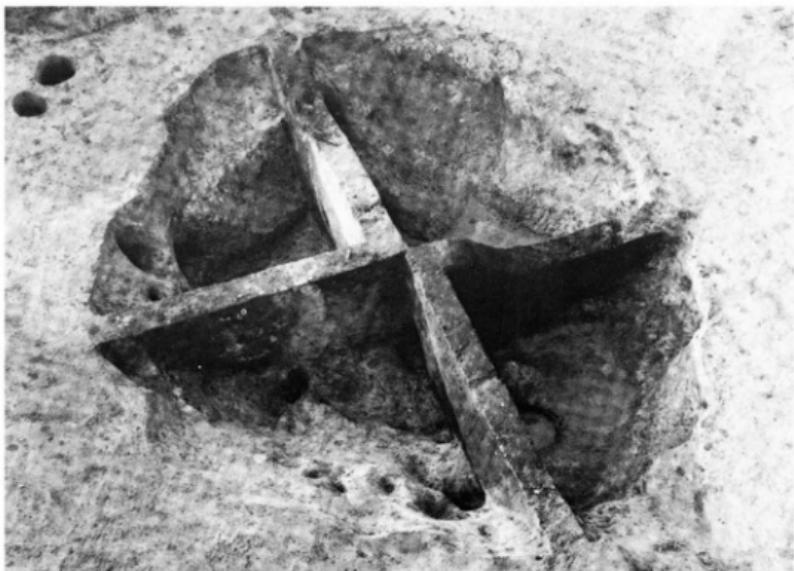
C区の調査状況（西から）



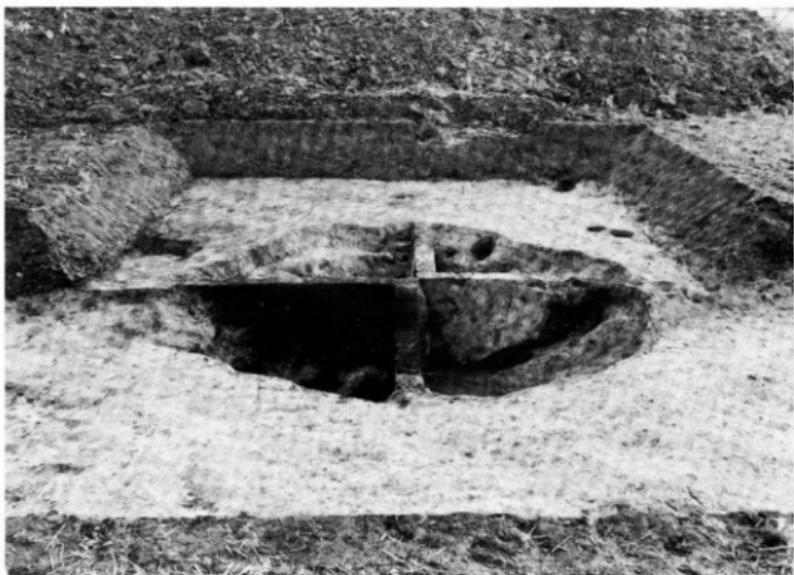
A区全景（西から）



B区竖穴状横構（北から）



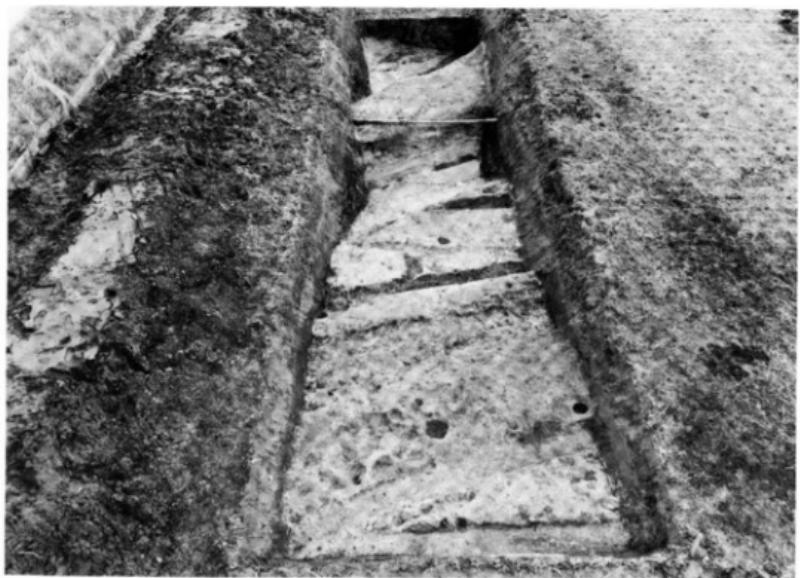
B区土塙（南東から）



B区土塙の層位（北から）



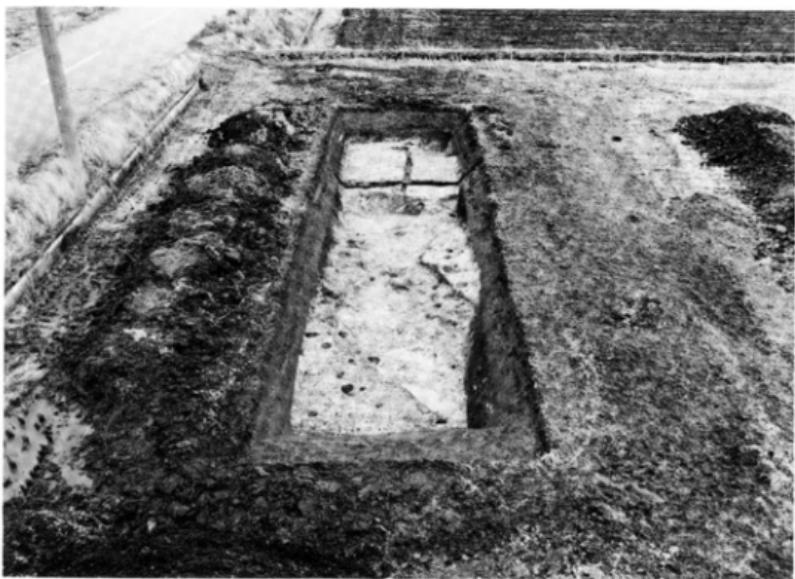
C区全景（西から）



D区全景（西から）



E区全景（西から）



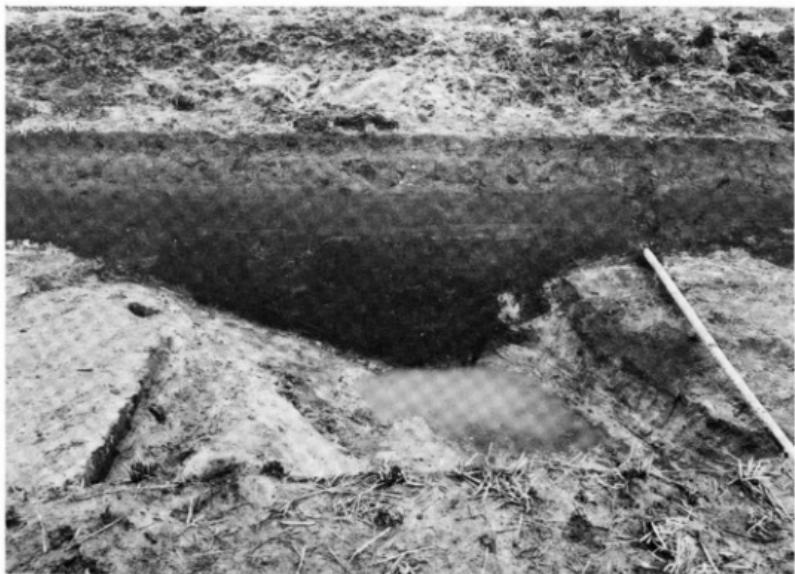
F区全景（西から）



B区 北壁の層位



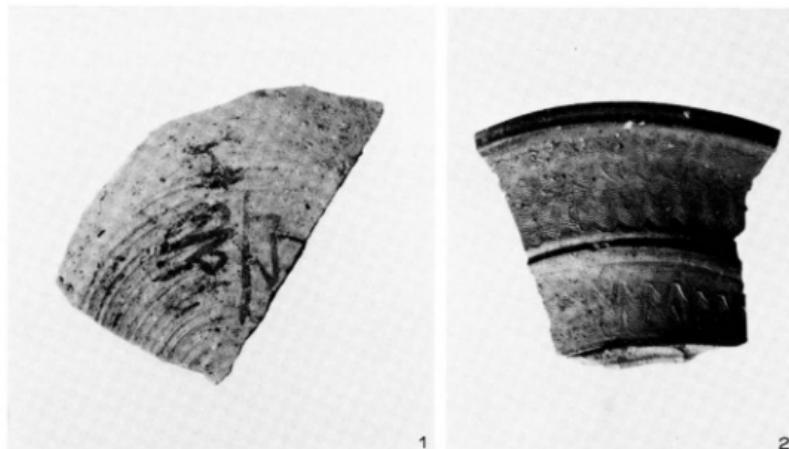
C区 北壁の層位



D区 北壁の層位（溝）



E区 北壁の層位

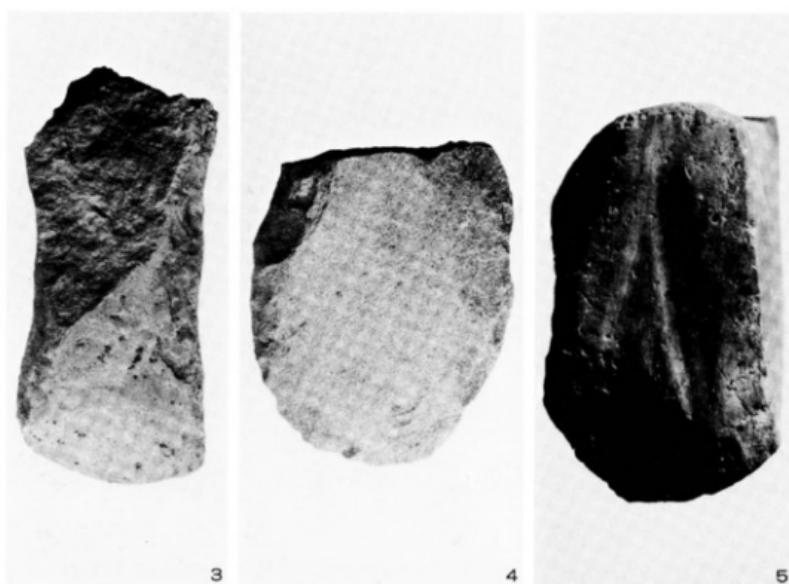


墨書土器（C区）

1

須惠器（E区）

2



3

打製石斧((C区)

打製石斧(E区)

4

砾石(E区)

5



調査区全景（西から）



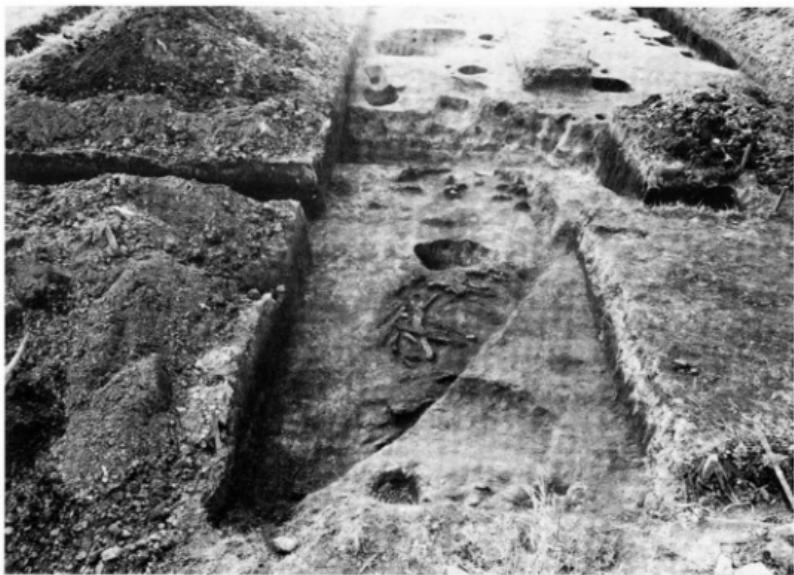
第1号住居跡付近（北東から）



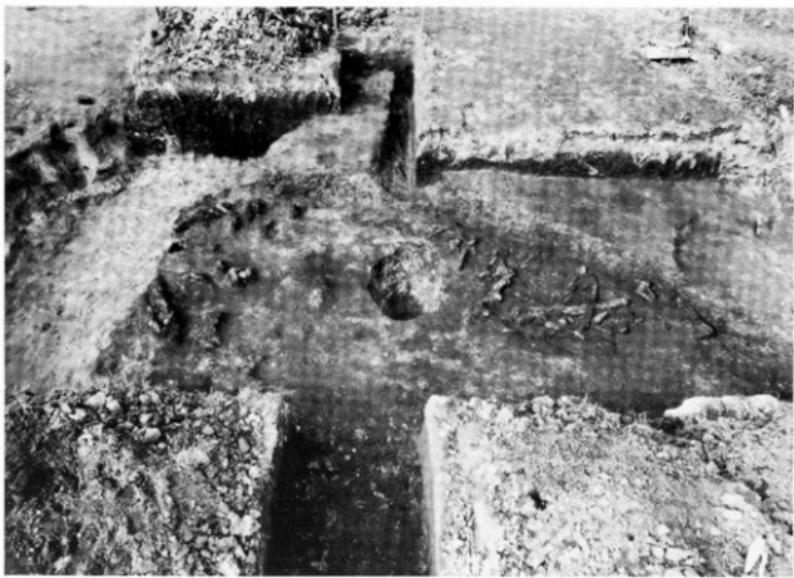
第1号住居跡（南西から）



第1号住居跡（北西から）



第2号住居跡（東から）



第2号住居跡（南から）



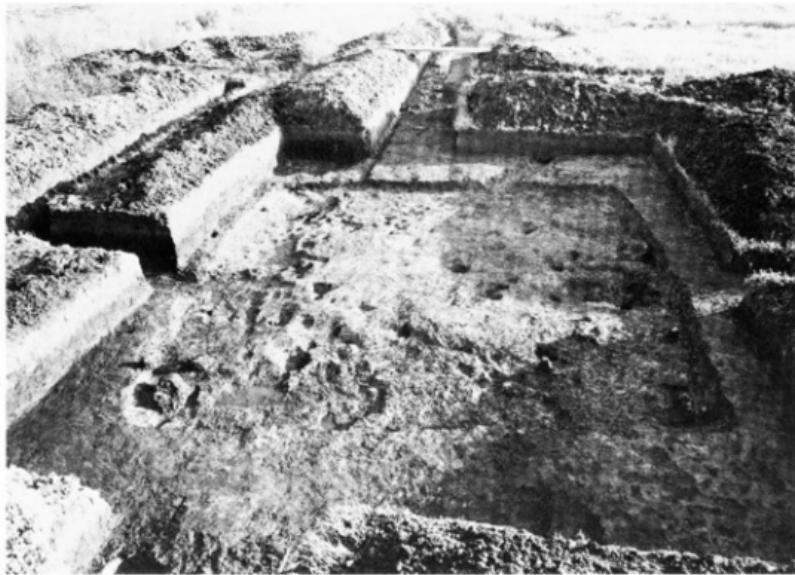
第3号住居跡（北西から）



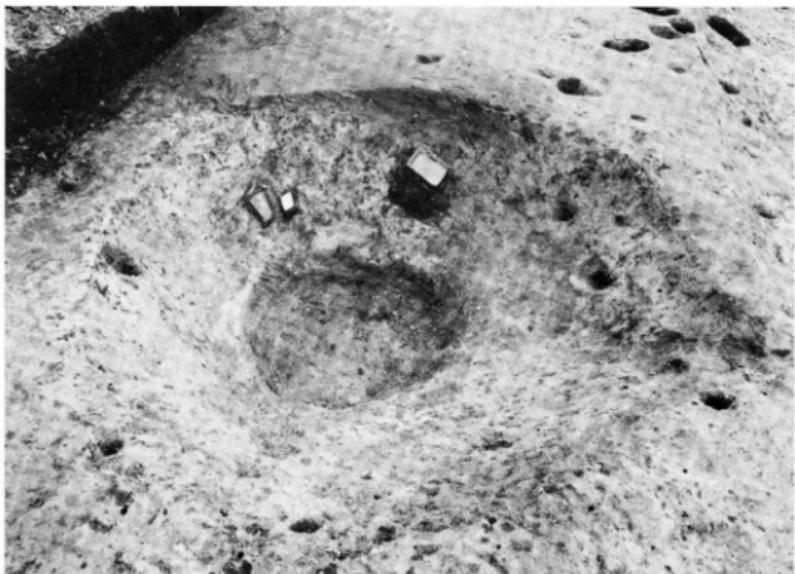
第3号住居跡（北東から）



第4号住居跡（東から）



第5号住居跡（北から）



穴 0-1 (南西から)



溝 0-5 (南から)

小矢部市埋蔵文化財調査報告書第22冊

富山県小矢部市道林寺遺跡

発行日 1987年3月31日

編集・発行 小矢部市教育委員会  
(〒932 富山県小矢部市木町1番1号)  
TEL 0766-67-1760

印 刷 アヤト印刷株式会社

